あの人に会いたい

part:06

今回の「あの人に会いたい」は、西広に在籍20年を経て大学教授となり、昨春に定年退職し、名誉教授となられた富山先生にスポットを当てました。社友会「準会員制度」にも即入会いただきました。

『図工・美術』はセンスの教科ではありません！

デザイナー、プランニング・ディレクターから大学教育者へ転進

愛知教育大学 教育学部
名誉教授
富山 祥瑞 さん
西広在籍20年
社友会準会員

富山先生（親しみ込めトミー）と久々に会ったのは昨年7月、九産大大学院の集中講義で来福の折でした。いきなり「概念砕き」や「デザインはセンスではない」など常識を破る発言が飛び出し、あっという間に時間超過…。再訪の9月、九州博報堂で再会、じっくり話を伺いました。（聞き手：志水 安）

まず大学へ転進した切っ掛けは？

富山　直接的な影響は、CIデザイン※1を日本に紹介した稲垣行一郎氏との出会い。遡ること今から30年ほど前、九州芸術工科大学※2の教授を務めておられ、西広がクライアント企業向けに開催した先生のCIセミナー企画の世話係を社に命じられた。それが縁で、仕事の傍ら芸工大の大学院で学んだ。今の社会人向け大学院（リカレント教育）の制度がスタートした頃でした。

もう一つは、上司のマーケティング部長・岩田純一氏の面談。「お前の仕事は、後輩を育てること。そうでないと、組織としてノウハウが残らない。独りで、仕事を愉しむな」と。

当時の私は仕事が趣味みたいな感じでしたが、仕事にも教育という概念があるのに気づかされた。

その頃、教育現場では『総合学習』※3として「問題提起→最適解決力」を育てる動きがあり、それに呼応するかたちで愛知教育大に迎えられた由のようです。

＜熊本支社に赴任、1988年＞

33　福岡市版　2003年(平成15年)3月7日　金曜日

福岡市の富山さん、4月から

広告マンから助教授に

広告のマーケティングプランナーから国立大学の助教授に。広告代理店の西広（本社・福岡市）に勤務する富山祥瑞さん（53）が、四月から愛知教育大学（愛知県刈谷市）の美術教育講座で学生にデザインを教えることになった。「今までの自分の積み重ねをそのまま生かすだけと気負いはない。

愛知教育大でデザイン講座

富山さんは一九八二年に東京造形大学デザイン学科を卒業後、西広に入社。広告の企画だけでなく、企業のシンボルマークのデザイン、分譲マンションの商品化計画など幅広い分野で活躍してきた。

十五年ほど前から、持ち前のデザイン力を生かして文房具の豆知識をまとめたイラストシリーズを発行。そのうち約五十点は「東京国際文具フェア」に毎年出品したり、テレビ番組「TVチャンピオン」の文房具選手権に出演したこともある。

一九九六年には仕事の傍ら、「今までの広告代理店における開発の蓄積を系統立ててまとめてみたい」と九州芸術工科大学大学院の社会人大学院生に。「西洋美術史」や「造形論」などを学び、二年間で物事を観察する着眼点を養った。

富山さんは「広告から教育というとすごく変わるようだが、自分にとっては仕事の中身は同じ。むしろ民間企業出身という普通に近い感覚で、新たなデザインの風を送りたい」と抱負を語った。

大学院で2年受講「民間の感覚生かす」

＜当時を伝える西日本新聞記事＞

19年の教育者人生で学んだこと、伝授したことは？

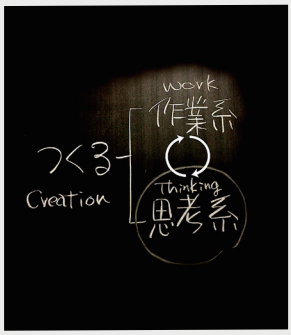
◎「構想力を育成」する

富山　大学に着任してからは教育の現場を客観的に観る機会があり、美術教育がいまだに「センスの教科」の扱われ方に正直びっくり。「はい、作業開始！」で片付けられるスタイルは昔のまんま。センスがベースなら義務教育での教科としての存在意義がない。美術科不要論が噴出する原因だろうと。

図工・美術は「構想する力を育成」する教科なんだけど：と、思ったのは着任後すぐでした。

◎大学教育での「概念砕き」

富山　幸いにも着任先は未来の教員を養成する教育大学。先生たちを育てる大学教育の段階で「美術教育から『お化け』退治をすれば、この課題解決は明解だ」と思いました。（お化けとは美術教育を支配している「自由」「個性」そして「センス」を指す）。「美術＝センス」と確信してやまない新入生へ、概念砕きをしてきました。



＜ものづくり概念の板書, 2000年＞

ものづくりには作業系と思考系が両輪ですが、考え抜く大切さを説いてきました。これは結構な力仕事ですが、4年生になる頃に、体得してもらっています。学生が教員になって教育の場から、すそ野を広げてくれる事が私のミッションへの解決策でもあります。

このお化け退治に奔走した19年間の大学勤務でした。

◎「デザイン教育」をデザインする

富山　またデザインに関しては、世間的にも「色や形をまとめる行為（構成）」といった見方をされがちだが、日常や暮らしの中で見落とされている様々な事象を観察し、その背後に潜む問題を掴み、造形の立場から課題解決に着眼した創発のプロセスです。そして、解決策が社会に伝わる仕組みまでも見通した一連のプレゼンテーション。これら情報や思考を整理する力の育成を目指してきました。

「『デザイン教育』をデザインする」は、私の大学での研究テーマそのものです。

◎原点の言葉

富山　40年以上前、私が東京造形大学の学生だった頃、気まぐれで受講した『音楽論』、CM音楽の実務家の先生が発した「センスによる創作では、いずれ行き詰まる。30歳台までは、しっかり自分の方法論を築くように積み重ねを大事にしなさい」の言葉。その後、西広時代（1983年～2003年3月）を含め、ずっ～と今日までも私の中で響き続けています。これが自分事ではなく、教育の基本であるのを悟ったのは、教育大学が自分の次のフィールドだったから。

◎「教育のクライアントは、未来社会」

富山　愛知教育大（2003年4月～）では、美術教育講座に所属。当初は美術教科としてのデザイン教育を担ったが、後に自分の中で「授業デザイン」へと想いが募っていった。後に私の想いとシンクロするように、ちょうど愛教大附属名古屋小学校と大学の研究テーマが「授業デザイン」――いわゆる「アクティブ・ラーニング」※4となったのも何かの縁、授業そのものをデザインする考え方を教育主題に置いた。

世間では何かと「教員の仕事は大変だ」の声を聞くが、教員ほどクリエイティブな職はないと、学生たちに機会あるごとに話してきた――だって「教育のクライアントは、未来社会」ですから。

大学での印象深い思い出は？

◎「子どもは未来からの留学生」

富山　大学勤務での一番のびっくりは、私が愛教大附属幼稚園の園長を務めた事です。自分の中では附属小かな？附属中かな？と思っていたのですが、蓋を開けたら、まさかの幼稚園長でした。でも結果的には、今まさに21世紀型の教育テーマである「自らが学ぶ力」を養うアクティブ・ラーニングの原点が幼稚園教育に在るのを、しっかり学ばせてもらった3年間でした。ここでは「子どもは未来からの留学生」が園長活動の原点でした。

＜卒園式での祝辞シーン＞

＜ 愛教大附属幼稚園 園長時代 ＞

◎便利な人がやって来た・・・独り広告代理店

富山　ビジネス界からの受け入れにあたり、かなり反対があったのを後で知りました。最終段階の教授会では通常シャンシャンの採用承認ですが、私の時は1／3の反対があったそうです。とは言いながら着任時は「広告代理店から便利な人が来た」とあって、学内のあらゆる印刷・広報物の制作依頼が舞い込んできた。

国立大学は、どこでもそうでしたが、組織に広報部門はありませんでした。受験生向けの『大学案内』にしてもタイプ印刷の様相でした。

当初10年ほどは大学広報の企画・制作を独りでやっていました。これでは大学に来た意味がないな、との思いがなかった訳ではありませんが、自らがクライアントの立ち位置で楽しかったので苦にはなりませんでした。

<小型ポスター、新聞広告、大型ポスター、パンフレット>

当時、本業の授業準備等を含めると月200時間以上は時間外をやっていたのではないでしょうか(あっ！教員には手当ありません)。

「これから大事になってくるから」と広報部門の立ち上げを大学に働きかけ、ようやく数年後に実現しました。誕生後は本業の教育に力点を置けるようになりました。

◎深夜営業研究室

富山　今の働き方改革の下では問題視されるでしょうが、近年まで大学は良い意味でも悪い意味でも管理はおおらかでした。この緩さの支えで私のゼミは「不夜城」と呼ばれたものです。4年生には深夜まで卒業研究の指導をしていました。学内には幾つかの深夜営業研究室がありました。

<深夜営業研究室の卒制ゼミ光景、2021年1月>

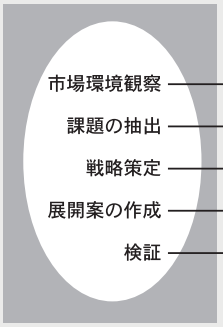
◎オンライン授業の限界

富山　大学の授業では「板書とライブ」にこだわってきました。主流のパワポさえも使わなかった。ところが、コロナ禍でオンライン授業を余儀なくされてきた。遠隔授業用に作った映像番組は、きれいに編集できた自己満足はありますが、教育の理念からすると、私の中では不完全に思える。

ビジネスでのテレワーク「活用」と、教育でのオンライン「代替」では、その意味合いが大きく違う。

西広時代の学びは役立ったか？

富山　広告と教育は一見すると全然違う方面に思われるが、学校教育の組み立てと広告プランの組み立ては一緒であるのに気付きました。ビジネスと教育の二つの世界を体験したからこその発見です。



<ビジネス企画書>

<授業指導案>

感性ではなく、ちゃんと調査や観察して課題を見つけていく学修法が教育にも求められています。またスキルアップは、同じことの繰り返しではなく、積み重ねが大切！

もし、ずっと西広に居たなら、どんなクライアントに出会えたのかと想像すると面白いですね。西広時代の後半では「宗像・樟陽台」の商品化計画や、長崎「パークコミュニティー桜の里」の街づくりデザインなどは媒体料や制作料とは別に数千万円のプランニング料が獲得できた。

<街並み・家並み・道並みを設計の「桜の里」、2001年春>

広告代理店であるために、媒体扱いのオマケになりがちな企画に対し、むしろ徹底して追究した実験業務でした。

<ゼミ生による似顔絵>

最後に、やり残したことは？

富山　志水さん(新入社員時の直属の上司)には「あの世間知らずのこいつが・・・」と思われているでしょうが(笑)私も定年を迎えました。そこそこミッションは達成されたかな、とも思い、愛教大での大学教育には時間の句読点(ピリオドではなく)を打ちました。まずは撮り貯めたグッズや植物の写真、研究資料を体系化しているころです。

本が売れない時代ですが本など企ててみようかな、と。あと、個人ホームページを開設していますが、愛教大寄りですので、これも少しずつリニューアルしていくつもりです。

大変お疲れさまでした。
～思えば、新入社員の研修時「デザイナーって何をする職ですか？」との質問に面食らったのを思い出した。早いもので40年ほど前の話である。そもそも彼は他のデザイナーとスタート時点から違っていて、風変りであった。我々もデザイナーにはやはりセンス磨きを求めていた。しかし彼はセンスではない観察眼という筋力を鍛え、真理を追究するのをむしろ愉しみながら社会人を積み重ねてきた。まだまだデザイン思考の流れは枯渇どころか、湧き続けているようだ。（聞き手：志水　安）

＜ホームページのトップ画面＞

ホームページ
https : //www.tomiyama-stationery.com

メールアドレス
tomiyama@auecc.aichi-edu.ac.jp

富山　祥瑞
とみやま　しょうずい

プロフィール

愛知教育大学　名誉教授　63歳

1983年(株)西広入社。当初4年ほど広告無知のデザイナーもどき。熊本支社プランナー（～1990.3）を経て、以降はマーケティング畑に従事。2003年、地縁の無い愛知教育大学に招聘、助教授（現：准教授）を経て教授（2007.4～）。在任中、附属幼稚園の園長を兼任（2016.4～2019.3）、また新設となった教職大学院教授を歴任（2020.4～）。2022年春、定年退職し現在は名誉教授。愛知県在住（宮崎県出身）。

註1【CIデザイン】 Corporate Identityの略称。ビジュアル面では企業のシンボルデザインやスローガンの刷新、 その大前提としては「どう思われているか」「どう思われたいか」といった企業マインド面の観察活動が基底となる企業改革のムーブメント。

註2【九州芸術工科大学】 全国一小規模でユニークな国立大学でした。今から20年ほど前の2003年、九州大学と統合し、現在も「芸術工学部」として大橋キャンパスに在ります。

註3【総合学習】 正式名は『総合的な学習の時間』。「自ら課題を見付け、自ら学び自ら考え、問題を解決する力などを育てること、また、情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討議の仕方などの学びやものの考え方を身に付け、問題解決に向けての主体的・創造的な態度を育成」（1998年公示時の学習指導要領） —— これって、デザイン思考そのものです。

註4【アクティブ・ラーニング】 2017年に告示の学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」として登場した教育理念。教師の「仕掛け」が大前提となる探究型学習。

富山先生の本学大学院生向けの集中講義を拝見し、学生の意欲の引き出し方や問い方、意見の選び方に感銘！

九州産業大学 芸術学部 助教
ビジュアルデザイン学科
グラフィックデザイン専攻
水間景子さん
（元CS西広デザイナー）

水間さんは、2021年4月より母校恩師からの誘いを受けて、九産大芸術学部・助教に転進。このたび、富山先生の来福に、授業を拝見させてもらい、その巧みな指導法に感銘を受け感想を寄せてくれた。

富山先生への初印象は名誉教授というより、学生のお父さんみたいな気さくさを感じたとか。たまたま同郷の宮崎出身の大先輩にあたるが、新進の教員として臆することなく、富山先生と同様に実践経験を生かし、「仕事の面白さ」を学生たちに伝えてほしい。

（聞き手：志水　安）

水間　景子
みずま　けいこ

プロフィール

宮崎出身。2010年九州産業大学芸術学部卒業、CS西広入社。主な業務担当は、もち吉、JA全農ふくれん、MJR等。2021年4月より現職。

「あの人に会いたい part:06」正誤票

『N+Q』p.16	誤	正
1段目キャプション	＜ものづくり概念の板書, 2000年＞	＜ものづくり概念の板書, 2019年＞
3段目キャプション	＜卒園式での祝辞シーン＞	＜入園式での祝辞シーン＞